

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.39

発行 2003.3.31

編集 佐賀県立九州陶磁文化館

代表者 秀島辰美

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町中部乙3100-1
TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

印刷所 山口印刷株式会社・伊万里市



てつ えりよくさいかたがみずりからはなもんおおざら
鉄絵緑彩型紙摺唐花文大皿

(佐賀県重要文化財)

館蔵資料

1610～1640年代

口径 45.6cm

高さ 14.7cm

鉄絵銅緑彩と型紙摺の2種の技法によって装飾される希有な作品で、力強く描かれた緑色の花文と化粧土による白い花文が調和している。器形は大型の深皿で、高台は口径に比較して狭く、二ヶ所を削り込んだいわゆる割高台である。江戸初期に武雄地区で焼造された肥前陶器を代表する貴重な作品である。

寄贈記念展のお知らせ

「白雨(はくう)コレクション展」

○趣 旨

平成14年度に寄贈を受けた約400件の陶磁器は、佐賀県出身の故蒲原信一郎氏(号「白雨」)が収集されたものです。

佐賀で集められた肥前の陶磁器を中心に、茶道具類を含む九州、日本、東洋の陶磁器も含むコレクションは、かつては調度品として屋敷を飾り、茶会に使われるなど今はなき故人の生活の場を豊かに彩ってきました。

この展覧会は、明治生まれの収集家が、大正・昭和・平成の時代を通じて愛蔵してきた興味深い陶磁器の数々を、故郷佐賀で紹介するものです。

○主催および会場

佐賀県立九州陶磁文化館

○会 期 平成15年10月3日(金)～11月24日

(月・祝日) 48日間

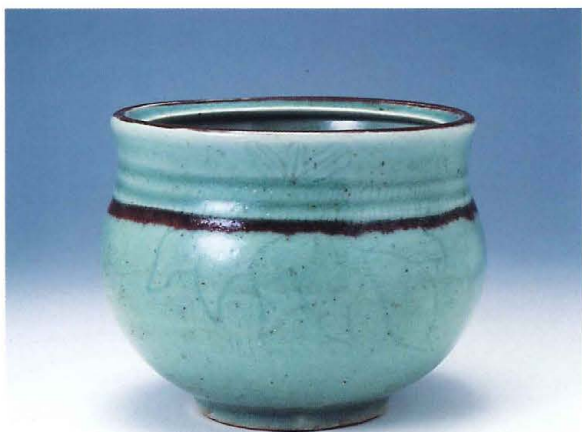
月曜休館(月曜が休日の場合は開館)

○観 覧 料 無 料

○出品点数 約400件

○展示内容 江戸中期から幕末・明治までの肥前磁器および中国など他産地の製品。

○図 録 展示品から100点を選び掲載した図録を刊行する。



青磁辰砂彫文水指
肥前・有田窯 1630～40年代



色絵群馬文変形皿
肥前・有田窯 1650年代頃



青磁染付桃文皿
鍋島藩窯 1690～1730年代

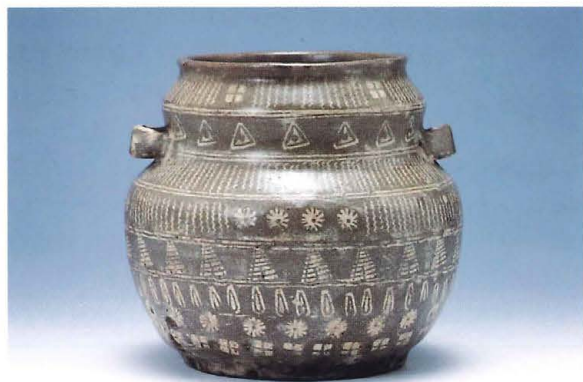


色絵花束文皿
鍋島藩窯 1710～40年代

平成14年度

「新収蔵品展1」のお知らせ

- 会 期 6月3日(火)～6月15日(日)
 ○内 容 平成14年度に購入・寄贈により新に収蔵した作品を紹介いたします。今回は大型で
 一對の色絵狛犬、唐津焼の象嵌水指などの
 肥前のやきものの他、熊本の小代焼大瓶な
 ども展示いたします。また、江戸時代の煎
 茶の本などの陶磁器関連資料もあります。
 ○展示数 35件53点 ○展示解説会 6月7日(土)
 ○場 所 第1展示室



象嵌耳付水指
肥前・大草野窯1600～1630年代



色絵狛犬
有田 1680～1700年代



釉下彩桐菊花文輪花皿・小鉢・蓋付碗 等
佐賀県嬉野町・源六焼 明治30～40年代頃 寺田昇氏贈

テーマ展 「コレクションの愉しみ ーそば猪口ー」展のお知らせ

- 会 期 7月15日(火)～7月27日(日)
 ○内 容 現代でも人気のある「そば猪口」を、時代
 的な変遷を明らかにするとともに、その愉
 しみ方を体系的に収集された個人コレクシ
 ョンなどにより展示する。
 ○展示数 約100点 ○展示解説会 7月19日(土)
 ○会 場 第1展示室



そば猪口を愉しむ

テーマ展 「宴の大皿」展のお知らせ

- 会 期 9月17日(水)～9月28日(日)
 ○内 容 主として宴会に用いられた大皿は、美術的
 に優れたものが多い。初期伊万里から幕末
 頃までの大皿を幾つかの視点で展示する。
 ○展示数 約30点 ○展示解説会 9月20日(土)
 ○会 場 第1展示室



色絵牡丹文大皿(青手)
肥前・有田窯 1650年代頃 館蔵

北前船と肥前陶磁流通調査報告

当館では、江戸時代の肥前陶磁における国内流通に関して調査研究を進めてきましたが、昨年度は日本海側に流通した肥前陶磁の実態を把握するために山陰、北陸、東北地方を対象に所在調査を行いました。主に、かの地に流通した肥前陶磁にどのような傾向があるかをさぐるための調査でしたが、訪問調査を行う前に日本海沿岸に位置する県市町村の教育委員会191機関と埋蔵文化財センターおよび事業団16機関の都合207機関に対し、肥前陶磁の所在についてアンケート調査を行いました。アンケート調査では、肥前の陶磁器の所蔵や情報提供をいただき、それをもとに訪問先を選定しましたが、同時に以下のような質問項目をアンケートにもうけました。

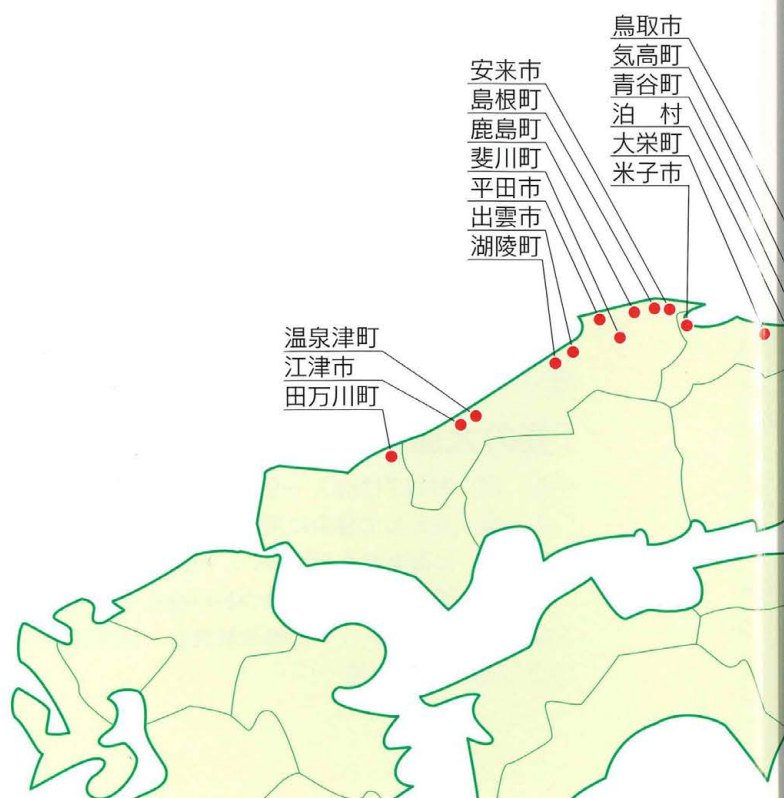
「貴地において、陶磁器販売の生業を「からつや」あるいは「からつもの屋」と呼ぶことがありますか。または、陶磁器のことを「からつもの」と呼ぶことがありますか。

このような質問項目をもうけたねらいは、陶磁器の総称として、現在日本各地で「せともの」と呼ぶように、「からつもの」と呼ぶ地域があるという、その実態を把握したいと考えたからです。広辞苑第三版では、「唐津物」の②として「関西で陶磁器の称。」とあり、「唐津屋」として「関西で、陶磁器を製し、または売る家。」とあります。しかし、第五版では「唐津物」の項目は「中国地方以西で、陶器全般の俗称」とされ、「唐津屋」を「中国地方以西で、陶磁器を製し、または売る家。また、その人をいう。」と改められています。このことは、「からつもの」あるいは「からつや」という言葉が使われる地域が次第に判明してきていることを示しているようで興味深いことです。しかし、中国地方以西に限らず、日本海側ではもっと広くこの言葉が分布しているのではないかという推測がありましたが、広域にわたって悉皆調査した結果ではありませんでした。そこで、より正確な分布実態を明らかにするためにこの質問項目を設けたのです。207機関へのアンケートのうち138機関よりの回答があり、そのうちの51機関から「からつもの」あるいは「からつや」と呼ぶことがあるという回答をいただきました。この結果を地図上におとしたものが右の地図です（県としての回答と市町村の重複分は省略）。山陰・北陸地方に多く分布し、新潟県以北では佐渡に例をもつほか、青森県の小泊村からの回答がありました。この語を用いる地域は中国地方以西のみならず石川、富山を含む北陸方面に分布しています。新潟の上越市からの回答ではたいへん興味深いことに上越市では「せ

ともの」であるが、当市から西へ約40kmの糸魚川市以西で「からつや」「からつもの」といいます。糸魚川では「せともの」と混在という情報をいただきました。アンケートでも、糸魚川市以西の富山県沿岸になると「からつもの」と呼ぶことがある地域が集中するという結果となりました。

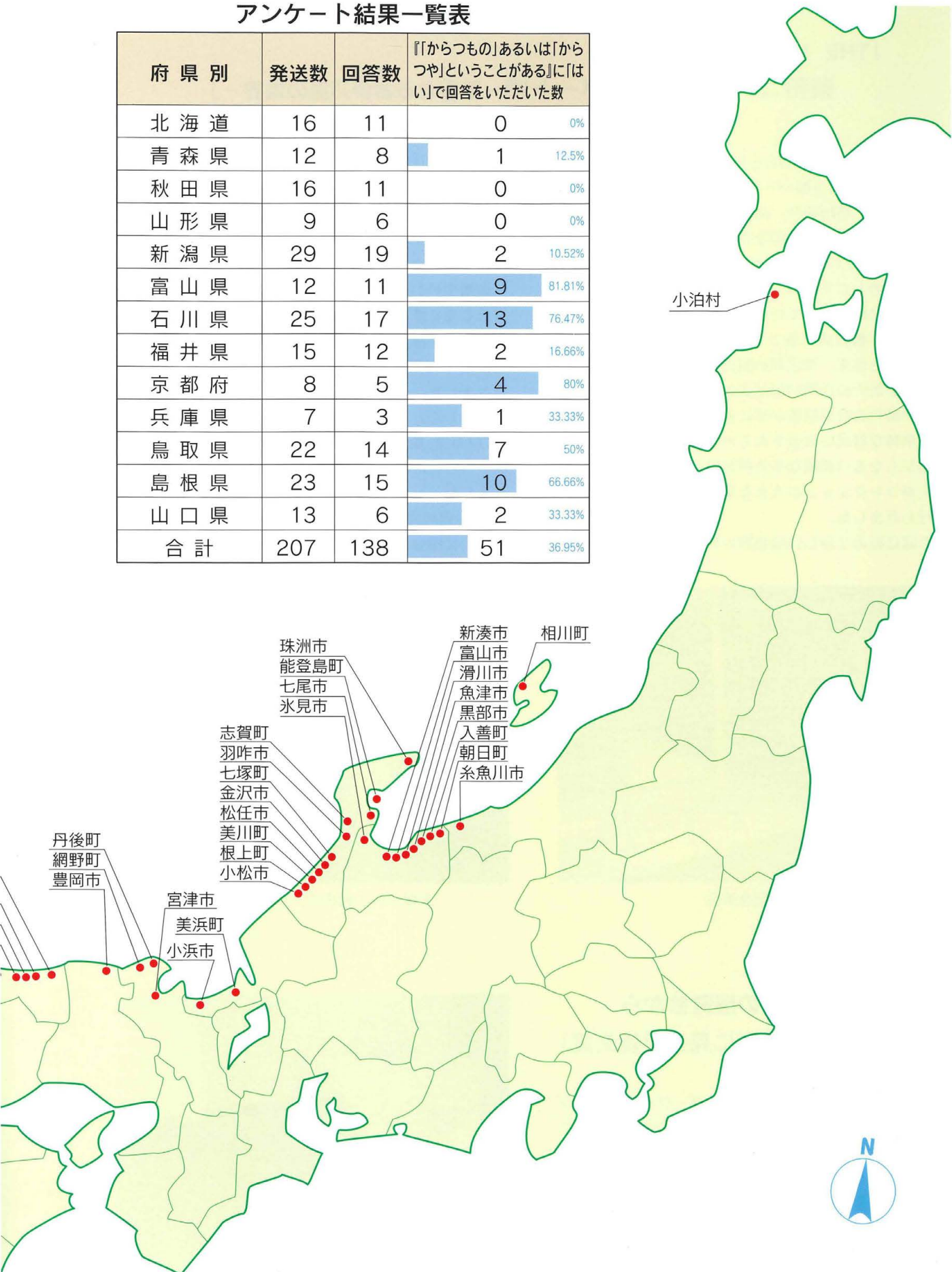
所在調査のため島根を訪問した際に地元の教育委員会の方に「からつもの」という語についてたずねたところ、20歳から30歳代の方はそうした言葉をご存知なく、50歳代以上の方は「からつもの」を陶磁器の総称として使用しておられたということを伺いました。このように「からつもの」という言葉が、現在は次第に消えつつある言葉であると感じました。たいへんお忙しい中、アンケートにご回答下さいました皆様に心から御礼申し上げます。また、このアンケートにたいへん貴重なご意見を賜りました前山博氏に御礼申し上げます。

(藤原友子)



アンケート結果一覧表

府 県 別	発送数	回答数	『「からつもの」あるいは「からつや」ということがある』に「はい」で回答をいただいた数	
北海道	16	11	0	0%
青森県	12	8	1	12.5%
秋田県	16	11	0	0%
山形県	9	6	0	0%
新潟県	29	19	2	10.52%
富山県	12	11	9	81.81%
石川県	25	17	13	76.47%
福井県	15	12	2	16.66%
京都府	8	5	4	80%
兵庫県	7	3	1	33.33%
鳥取県	22	14	7	50%
島根県	23	15	10	66.66%
山口県	13	6	2	33.33%
合 計	207	138	51	36.95%



平成14年度寄贈記念展報告

「THE LAST EXHIBITION

柴田コレクション展パートⅧ－華麗なる古伊万里の世界－」

平成14年10月4日から12月1日までの59日間、「柴田コレクション展パートⅧ」を開催いたしました。当展覧会は、柴田明彦、祐子御夫妻から御寄贈いただいた江戸時代の有田磁器を初御披露目する目的で平成2年以来平成13年まで7回にわたり開催してきましたが、周知のとおり毎回、単なる御披露目展ではなく独自のテーマに基づいて行われてきました。

今回は、御披露目展としては最後の展覧会となり、最初期から幕末・明治期の有田磁器まで582件1,594点の過去最大の点数が展示されました。

江戸時代の有田磁器が単に初期伊万里や金襴手といった単純な様式に代表されるのではなく、実に様々な種類からなる「華麗なる古伊万里の世界」を紹介し柴田夫妻コレクションの大きな功績の一つを示すテーマで行われました。

今回は極めて珍しい最初期の有田磁器である砂目積

みの製品や辻家、今泉家、酒井田家の製品とそれぞれ想定ないし特定できる貴重なやきものも展示され、大きな話題となりました。また、江戸中～後期の食器を見た女性の中からは「見るだけでなく、使ってみたい」という声がよく聞かれました。

会期中の10月19日には寄贈記念展示解説「柴田明彦氏と見る柴田夫妻コレクション」を柴田明彦氏御自身による解説で開催しましたが、多数の応募者の中から抽選で選ばれた30名の方々が熱心に聞き入っておられました。当日は辻公也氏による寄贈記念茶会も行われました。また、11月9日は寄贈記念シンポジウム「古伊万里・現代・未来」を講堂で開催しましたが、約200名の聴講の方々がパネリストの話に熱心に聞き入りました。

59日間の会期中に15,890名の入館者があり、好評のうちに閉会を迎えました。



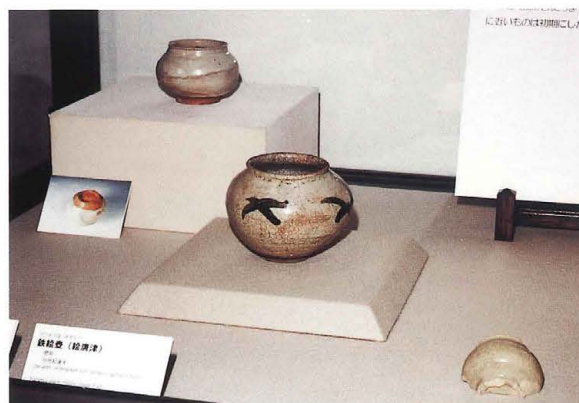
寄贈記念茶会



入場一万人目の方への記念品贈呈

平成14年度の展覧会から テーマ展「肥前陶磁に見る日韓交流」

平成14年6月4日～23日にサッカーワールドカップ日韓共同開催を記念して肥前のやきものに見る日韓交流に焦点をあてたテーマ展を開催しました。肥前陶磁の草創期に唐津焼や初期伊万里などが受けた韓国(朝鮮)のやきもの技術を最新の研究成果を元にわかりやすく比較展示しました。18日間の会期中に3,228人の入館者がありました。



日仏3人展

平成14年7月16日～7月21日にフランスの陶芸家ジャン・ピエール・ヴィオと佐賀県の陶芸家濱崎節郎、岡本作礼の3氏による陶芸展が開催されました。粘土ではなく砂岩をそのまま素材とする濱崎、朝鮮唐津や井戸茶碗など伝統を基礎にする岡本、そして心象的なオブジェのヴィオと3人の作品はいずれも個性的なものばかりでしたが、意気投合する三人の作品はおたがいに影響しあっているようでした。6日間の会期中に1,558人の来館者が訪れました。



第1回伊万里・有田焼伝統工芸士展

平成14年8月3日～9月1日まで第1回伊万里・有田焼伝統工芸士展が開催されました。伊万里・有田地区の伝統工芸士のうち「上絵付」10名、「下絵付」16名、「ろくろ」14名の計40名の皆さんにより約100点の作品が一堂に展示されました。

「伝統工芸士」は厳しい認定試験を経て経済産業大臣から認定される資格であり、中村清六氏をはじめとする作品は皆、熟練の技を見せていました。次年度からも継続して開催される予定です。

26日間の会期中に5,842人の観覧者がありました。



西コレクション展

平成14年9月18日～29日に茨城県在住の西幾多さんから御寄贈いただいた陶磁器資料60件193点の寄贈記念展を開催しました。西さんの御寄贈品は鍋島藩重臣の中野家に伝わった貴重なものですが、中でも江戸後期の鍋島藩窯製品は伝世がはっきりしているとともにまとまった数量をもつ重要な研究資料です。12日間の会期中に熱心な鍋島愛好家など3,483人の観覧者が訪れました。



新春展 「やきものに描かれた人々」

平成15年の正月2日から13日まで新春企画としてやきものに描かれた人物文様の意味を考える展覧会を開催しました。江戸時代の有田磁器には様々な人物文様が描かれたり形象化されていますが、その意味について考察されることはあまり例がありませんでした。意外にも有田磁器の文様や形は中国や日本、そしてヨーロッパの故事や歴史上の人物が描かれていることが多く、その多くは招福、吉祥、教訓などを表わしており、あらためてやきものの文様の意味を考えさせる展覧会でした。11日間の会期中に1,357人の観覧者がありました。



シリーズ

やきものの技法 (34)

に
ご
し
濁で
手

1670～90年代にかけて、有田南川原山(なんがわらやま)で作られた作品のなかに純白な美しい白磁に、余白をたっぷりとして、「粟に鶉」、「竹に虎」など一定の題材が優美に描かれた作品がある。その色絵磁器に用いられる白磁は「濁手」と呼ばれている。「濁(にごし)」は佐賀の方言で米の研ぎ汁のことをいう。「濁手(にごしで)」は米の研ぎ汁のようにやわらかみのあるミルクホワイトの色をした白磁素地のことである。一般の有田焼の白磁素地は、やや青みを帯びている。それに比べて、「濁手」は青みがなく、純白である。

しかし、江戸時代の後半には濁手素地づくりは途絶えていた。その復元が昭和28年(1953)、12代酒井田柿右衛門(1878～1963)と13代酒井田柿右衛門(1906～1982)の尽力によって成功した。

酒井田家に伝わる『土合帳(元禄三年二月)』を参考にして、今日では「濁手」の原料は有田町内にある泉山、白川、岩谷川内の3種の陶石が6:3:1の割合で調合されている。釉薬はごく薄くかけられ、下絵付けの染付はされない。

各陶石の焼成時における収縮率の違いによって、破損が多く、歩留まりがわるい。皿のような平たい作品で五割ほど、壺などの立体物だと二割程だという。それが濁手の途絶えた原因であった。

「柿右衛門製陶技術保存会」は昭和46年4月、重要無形文化財「柿右衛門(濁手)」の保持団体として認定され、13代の没後は当代柿右衛門がその事業を継承し、今日に至っている。

(吉永陽三)



色絵龍虎文輪花皿

有田・南川原山 1670～1700年代 当館所蔵

シリーズ

やきものにみる文様 (34)

せ
き
赤へ
き
壁ふ
賦

蘇軾(そしよく)(1036—1101)は中国、北宋(ほくそう)の政治家で文学者であった。蘇東坡(そとうば・そとんぼう)という号でも親しまれている。ちなみに豚の煮込み料理であるトンポーロウ(東坡肉)は彼が黄州へ左遷させられた際に豚肉料理について詠じた詩からつけられたという。蘇軾は中国を代表する文人官僚で、その生涯は政争の渦中にあった。明朗闊達で苦難に屈しない公明な人柄が人々に敬慕され、その詩文は中国のみならず日本でもたいへん愛されている。蘇軾は頭脳明晰で、若くして科挙に合格し、官僚として出世をとげたが、詩文によって政治を批判したとして、獄にいれられ死罪となりかけた。幸い赦され、流罪となった際に武漢市の西にある赤鼻山(湖北省黄冈県の長江沿岸)で詠んだ詩が彼の代表作「赤壁(せきへき)の賦(ふ)」である。(賦とは韻をふんだ美文のこと)その後、皇帝の側近に起用されたが、再び失脚し、果ては海南島に流された。帰還が赦されてまもない頃亡くなるという波乱に富んだ生涯であった。

この蘇軾が詠んだ「赤壁(せきへき)の賦(ふ)」は、「前赤壁の賦」と「後(こう)赤壁の賦」の二つがあり、前編は旧暦七月十六日の夜遊を叙情豊かにうたい、自然の悠久さと人間の命の短さを対比させ、自然の美しさを楽しむ喜びを表現し、後編はおよそ三ヶ月後の冬、再訪したときの十月十五夜の遊びを記して、自然の変化と人間の存在について歌ったものである。

肥前磁器にはこの「赤壁賦」をあらわした舟遊びの文様が描かれ、これは中国磁器の影響と考えられる。とりわけ、19世紀前半頃「前赤壁賦」の詩句とともに舟遊びがあらわされた製品がみられる。

(藤原友子)



染付赤壁賦文小鉢

有田 1789～1800年代 当館所蔵